

第17代学長 佐々木 重人

ささき しげと

1955年東京都生まれ。1978年専修大学商学部卒業。1983年専修大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。1983年本学商学部助手。講師、助教授を経て1995年教授。商学部長（2013～16年）。博士（経営学）神戸大学。税理士試験委員（2011～13年度）。日本会計史学会会長（2013～16年）。担当は会計史。主な著書『近代イギリス鉄道会計史—ロンドン・ノースウェスタン鉄道会社を中心に—』（単著）、『体系現代会計学第5巻 企業会計と法制度』（共著）、『歴史から見る公正価値会計—会計の根源的な役割を問う—』（共著）など。

育てられた専修大学の ためにすべきこと

高校生時代まで

私は、中学校卒業まで、東京都杉並区で過ごしました。小学生時代の私は、勉強よりも「外遊び」が大好きで、夏休み中などは、「蝉捕り」に明け暮れる毎日でした。午前、午後、夕方と1日に3回、蝉のよく集まる木巡りに出かけておりました。家におりましても、外から好きな種類の蝉の鳴く声がすると、すぐに蝉捕り網を持って飛び出してゆくほどでした。中学生となっても、趣味として今も続いている鉄道模型（HOゲージ）やクラブ活動（軟式テニス部）に関心があり、勉強は「おつきあい」程度であったと思います。

1970年に東京都町田市に転居し、地元の高校に入学しました。やはり勉強よりもクラブ活動（軟式テニス部）が中心の毎日でした。高校3年の夏となり、やっと大学受験のための勉強を始めましたが、高校卒業の年の大学受験はすべて失敗でした。そのため、1年間の大学受験浪人を経験しました。浪人時代は、自分の将来の進路について、あらためて考え直す機

会となりました。そんな折、父の勤務先で学生アルバイトをしながら公認会計士試験に合格したというY氏のことを知ることとなりました。自宅からも通いやすい専修大学を受験したらどうか、という父からのアドバイスもありました。そんな経緯もあって、1974年に専修大学商学部会計学科に入学することになりました。

専修大学での学生時代

専修大学商学部に入學したての頃、会計学関連科目が自分の将来のキャリアとも結びつくイメージもあり、それまでの「一夜漬け」の勉強スタイルをやめて、一冊の専門書を精読することで、特定分野を体系的に学ぶ充実感を得ました。3年次となり、ゼミナールで指導していただいた恩師と接するうちに、研究職（大学教員）への道を自然に志すようになりました。

専修大学大学院修士課程の学生となって、自分の前に広がる未知の学問という海の広大さに愕然とし

ました。年末の寒い日の夕方に、大学で数百枚に及ぶ資料の複写をしていた時などは、一生懸命にやっているのに、目に見える成果が出ているようにも思えず、大学同期の友人たちがすでに経済的にも独立した社会人となっていたことから、なにか自分だけが残されているのではないかという気持ちになって、将来に対する「不安」と「焦り」を感じたこともありました。しかし、大学院博士課程に進学してからは、もう後戻りはできないという覚悟ができました。指導教授をはじめ、多くの先生方からも研究者の卵としての心得を本格的にお教えいただくようになりました。すでに定年退職していた父から経済的支援を受けていたため、なんとか早く自立しなければという気持ちも強く、論文の作成にあたっては、がむしゃらに、もがき苦しんだように思います。

商学部教員として（教育と研究）

1983年から商学部助手として専修大学に奉職しました。指導教授は、私を研究者として何とか独立立ちさせることに意を尽くしてくださいました。助手2年目となった1984年6月頃に、指導教授が「佐々木君、今度の夏休みに、アメリカのイリノイ大学の図書館に行って、研究に必要な文献や資料のコピーを入手してきなさい」と言って、文献・資料リストをドサッと私の前に置いたのです。私は、それまで、一度も海外渡航経験がありませんでしたし、英会話もろくにできない有様です。すっかり、怖じ気づいてしまいました。しかし、断ることはできませんので、慌てて英会話学校に通ったり、航空券の手配のほか、パスポートやビザ取得申請などに奔走しました。しかし一方で、指導教授は、イリノイ大学の教授や現地に留学中のご友人に連絡をして、私への援助を依頼してくれていたのです。なんとか乗り切ったひと夏の「しんどい」経験は、その後、自分自身の必要から数度に及んだ海外での史料収集にあたっても、役立つノウハウとなりました。

私の専門領域は、会計史です。これまで19世紀イギリスで本格的に発展を遂げた株式会社形態の企業、特に鉄道会社の会計実務について研究してきました。現在の財務会計制度の基盤構造もその時代か

らの延長線上にありますので、その歴史的成り立ちを理解することが、現代会計の本質を見極めることに繋がり、今後の道筋を定める作業にも寄与すると考えております。しかし、「言うは易く、行うは難し」で、学部ゼミナールの学生諸君との時間は、ほとんど現代会計の理解を中心に費やされ、その歴史的考察を楽しむまでの時間が充分とれないので、反省することが多いです。

学長として

今般、学長という職務を担うにあたり、その任期3年でもっとも力を入れたいのは、故矢野建一前学長が練り上げた基本プラン、すなわち創立140周年（2020年）を目標とする①神田新校地での新校舎建設と②神田キャンパスにおける国際系新学部の設置、商学部の生田キャンパスから神田キャンパスへの移設および生田キャンパスでの文学部ジャーナリズム学科の改組設置を確実に実行すること、そしてこのプランに連動して既存学部で進行中の改革プランをサポートすることです。

育友会の思い出と ご父母・保護者の皆様へ

私が商学部4年次の学生だった1977年度に、父は、東京多摩地区の育友会支部長を務めました。夏期休暇中恒例の「支部懇談会」には、父に頼まれ、北海道出身の同級生である友人と一緒に、当日の会場受付の手伝いをいたしました。父は、「出来のよい(?)息子」のために一生懸命であったと思います。2004年に亡くなった父が健在であれば、「お前が学長か」と言われてしまいそうですが、「見守ってほしい」と、墓前で祈りました。今、私は小学3年生となった息子の親となりましたが、かつて父や母が「私」に寄せた想いを自分の子どもに重ねあわせることも多くなりました。そのような想いは、今でも専修大学の学生さんの一人一人に同様に向けられているということを肝に銘じつつ、大学の発展のために努力したいと思っております。ご父母・保護者の皆様には、引き続きよろしくご支援を賜りますようお願い申しあげます。